

令和 3 年 5 月 27 日現在

機関番号：24402

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2020

課題番号：17K02459

研究課題名（和文）近代実録・講談本の研究 事件もの・歴史もの 説話 の生成と展開

研究課題名（英文）Understanding modern "true record" and kodan literature: the origin and evolution of tales based on current and historical events

研究代表者

奥野 久美子 (Kumiko, Okuno)

大阪市立大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：50378494

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：4年の研究期間で、学会・研究会発表3件、論文3本（成果報告論集の編集を含む）をまとめ、事件もの講談本、事件もの実録、一休やロシア文豪、木曾義仲の 説話 などを研究素材とし、それらの近代文学における生成と展開を跡づけることができた。日本近代文学が古典や外国文学だけでなく、実録・講談も含む豊かな土壌に咲いた文化であることを、一端ではあるが実証できた。海外共同研究者との共同研究を論集にまとめることができたことも成果である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、事件もの実録・講談本の実態と、その文学作品への流れを実作に即して解明してきた。これまでほとんど手付かずであった、事件もの講談本の実態調査研究（書誌的調査も含む）や、有名無名の人物の近代における 説話 生成過程の研究の端緒を開くことができたことが、学術的意義である。また、歴史上有名な人物の 説話 形成には研究者のみならず一般の関心も高く、実際に本研究の成果論文の中には、一般向けの公開講座での講義内容をもとに加筆したものもある。講談本や実録の存在を広く知らしめ、関心を高めてもらう一助となったと考えている。

研究成果の概要（英文）：During the four-year research period, three presentations at academic societies and study groups and three papers (including a research report) were compiled, and kodan-books on incidents, actual records of incidents, Ikkyu, Russian literary masters, and Kiso Yoshinaka's <SETSUWA>(tales) as a research material, I was able to trace the generation and development of these in modern literature. I was able to prove, at one point, that modern Japanese literature is a culture that has bloomed in abundant soil, including not only classical and foreign literature, but also actual records and storytelling. It is also a result that we were able to summarize joint research with overseas collaborators in a collection of papers.

研究分野：日本近代文学

キーワード：講談本 実録

1. 研究開始当初の背景

本研究開始に先立ち、申請の時点で、研究の核を示すキーワードについては、独自に以下のように定義していた。本研究課題名にある「説話」とは、近代以降の実録・講談本、小説等によって変容を重ね受け継がれていった伝説をいう。活版印刷となった近代独特の生成と展開(講談本では同じ内容の本が演者名や題名を変えて出版されるなど)があるため、古典説話と区別し「説話」とした。また「実録」の語も近世の所謂実録から範囲を広げ、明治以降、実在・非実在の事件や人物を、実録風(実際にあったかのような)の読み物にしたものを広く実録と呼ぶことにした。

研究の背景としては、まず、かつての近代文学研究における出典研究は、古典文学や外国文学が対象であった。しかし、研究代表者の研究も含め、本研究開始以前の約十年余りで講談本を近代文学の素地や大衆文学への架橋として研究対象とすることが認知されてきていた。

研究代表者は、本研究開始以前の十数年間で、講談本を中心に、芥川龍之介、菊池寛など大正期の作家たちが、講談という大衆芸能をも貪欲に作品に取込んでいたことを実証してきた。例えば、国定忠次を主人公にした菊池寛の小説を分析するため、国定忠次ものの講談本、実録、随筆などを百点近く、2年以上をかけて網羅的に調査した結果、菊池寛の「入れ札」が従来の国定忠次ものにはない珍しい方法で書かれているとわかった。この研究から、講談本を含む近代文学研究には、実録も加えた「説話」全体の生成過程を追わねばならないと痛感し、次第に、講談と実録の関係や、実録そのものの研究に重点を置くようになった。

その中で、芥川龍之介旧蔵書の実録本3点を調査し、芥川作品との関連を指摘したこと、またこれらが、国定忠次などの有名人物を扱った実録ではなく、無名人物の一代記や事件ものであったことから、これまでのように有名人物の「説話」だけでなく、こうした事件もの「説話」の実録・講談本も対象にせねば、近代文学作品と実録・講談本の関係は明らかにできないと考えた。

近世からの講談研究には延広真治氏や菊池真一氏、故・中込重明氏らの多くの研究の蓄積があり、近代講談本に関しては、収集家としても知られる吉沢英明氏の『講談作品事典』(2008)等の研究もあった。しかし講談本のなかでも事件もの(探偵もの)講談本の実態についてはこれまで研究がなされていなかった。

また実録について、近世文学界では実録研究が確立されている一方、近代文学界では幕末開化期の毒婦もの実録以外では、実録はまともな研究対象とされなかった。しかし本研究開始の頃には、講談本同様、研究機運が高まり、1998年には藤沢毅氏による近代実録叢書の研究「『今古実録』シリーズの出版をめぐる」があり、生住昌大氏が明治の土族反乱もの実録を研究した一連の成果があった。ただ、実録は講談のタネになっていることが多く、実録と講談は切っても切れない関係にあるが、実録と講談両者に目配りをした研究は、近世文学研究において見られるものの、近代で実録・講談本両者を渉猟するような研究は少なく、今後ぜひとも必要であると考えていた。

そのような背景から、事件もの・歴史もの実録・講談本における「説話」の生成と展開の探求を研究テーマに定めた。また、研究開始当初、学界では、海外の研究者との連携や、研究の海外発信についても必要性が高まっていた。そこで本研究では、近代講談本を研究対象としている、アメリカ Oakland University の Stephen Filler 准教授を本研究課題の海外共同研究者とし、共同研究を進めることとした。

2. 研究の目的

上記のように、本研究開始前の段階で、研究代表者は実録本と講談本が、「説話」の生成と近代文学に与えた影響の重要性を再認識しており、新たな課題も発見した。それは、事件もの実録・講談本の実態と、その文学作品への流れを実作に即して解明することである。有名人物に限らず、明治以降、庶民が起した事件なども、新聞の後は実録本となり、「探偵実話」と冠した講談本もある。まずはそれらの実態調査研究、続いてそれらが小説等の文学作品に与えた影響を検証することを、研究目的とした。

そして調べてみると、明治30年頃、「探偵実話」と冠した事件もの実録・講談本が複数出版されていた。いわば近代実録・講談本研究という家に、歴史ものの部屋とは別にもう一つ、事件ものという部屋が存在しているわけである。特に事件もの講談に注目した研究はそれまでなされておらず、網羅的な「説話」生成の解明もないため、ぜひ開拓すべき研究分野であると考えた。

事件ものを中心に、必要に応じて(比較の必要性など)歴史ものも含めた中から具体的な素材を定め、その「説話」の生成(一素材につき、実録も講談本もある場合は両者の関係、また新聞記事との関係)とその後の書物での「説話」の変容、小説等への発展を明らかにする。繰り返しながら、本研究の目的は、近代文学の素地としての実録・講談本の実態を歴史もの/事件ものという複眼的視点から解明し、近代文学史に位置づけることにあった。その集積により、日本近代文学が古典や外国文学だけでなく、実録・講談も含む豊かな土壌に咲いた文化であることが実証できれば十分な成果である。

3. 研究の方法

研究対象はまず『探偵実話：官員小僧』（明治 34）ほか「探偵実話」と題された明治 30 年前後の事件もの講談本であったので、4 年間の研究期間のうち、特に前半は資料収集と調査に努めた。2017・2018 年度には、古書店を通じ、数十冊の「探偵実話」もの講談本や、関連資料を多く収集したほか、講師旧蔵の講談資料を数多く蔵する国文学研究資料館等で、閲覧調査を行った。

これらの調査をふまえて後半の 2 年間では、共同研究によりさらに研究を発展させるべく、2019 年 8 月に合同研究会を開催した。事件もの講談本を数多く所蔵する、国文学研究資料館に、講談資料と会場の提供で協力を依頼し、同館の青田寿美氏をコーディネーターとして、研究代表者の奥野と、海外共同研究者の S・フィラー氏および武田悠希氏がそれぞれ研究発表を行った。また、研究会当日は同館所蔵の講談本を会場に運び入れていただいたことで、実際に多くの資料を手にとりながら、それら資料の調査分析とその成果発表・議論とを同時に行うことができる、得難い機会となった。研究代表者はこの会で、同館も複数冊を所蔵する事件もの講談本「官員小僧」に関する調査研究を報告した。

最終年度となった 2020 年には、上記の 2019 年度研究会のメンバーと、講談本に関する他の研究者の研究プロジェクトチームとの合同で、実際に講談本を手に取りながらの研究会やイベントを行い、成果をまとめる予定であった。しかしコロナ禍のためフィラー氏を招聘することができないばかりか、講談本を実地調査しながらの研究会、イベントの計画も実行することができなかった。その代りとして、2019 年度の研究会の成果を報告論集としてまとめ、刊行した。

4. 研究成果

以下、4 年間の研究期間における本研究の成果を、年度ごとに示す。

2017 年度の研究成果としては、研究代表者奥野の論文

・「堺利彦の社会講談「一休和尚」と明治大正期の一休もの講談本 武者小路実篤「或る日の一休」に触れつつ」(単著、「國語國文」第 86 巻第 6 号 2017 年 6 月 601~615 頁)がある。ただしこれは事実上本研究課題の研究開始前からとりかかっていた研究であるため、厳密には本研究課題での成果とは言い難い。ただ、この拙論はまさに一休という説話の近代における生成と発展を実録・講談本から検証し、堺利彦や武者小路実篤の作品へつながる系譜をたどったものであり、本研究課題の準備中・申請中に研究と執筆にとりかかったものであるため、本研究課題と合致する内容の研究成果となっている。刊行は本研究の開始後である。

2018 年度は、口頭発表として

・「芥川龍之介の江戸と明治 奠都五十年言説の中で」(6 月 2 日近代文学会関西支部春季大会、於京都大学)

を行った。この研究についてはまだ論文発表はできていないが、芥川龍之介の開化期ものに関する研究であり、これについては本研究開始以前に、明治初期の事件もの実録本が、同じく芥川龍之介の開化期もの「開化の殺人」に影響している可能性を考察した研究を行ったことから派生した研究である。実録を含む明治初期の諸言説から開化期ものへの影響の可能性を示した。

2018 年にはまた、本研究課題である 近代説話 研究の一環として、当初予定していた研究範囲とは少しずれるが、芥川龍之介「山鳴」の研究を行い、以下の通り学会発表と論文発表を行った。

・「「山鳴」 原稿からの考察」(9 月 20 日国際芥川龍之介学会第 13 回大会、於サンクトペテルブルク大学、ロシア)

・芥川龍之介「山鳴」 原稿・草稿からの考察」(「國語國文」第 88 巻第 2 号 2019 年 2 月 33-54 頁)

「山鳴」は、トルストイ、ツルゲーネフを主人公とした小説であり、作者芥川が二人の文豪をどのように造型していったのか、また、その造型には同時代の日本文壇におけるトルストイ・ツルゲーネフ観と比べてどのような特徴が指摘できるのかを、具体的に明らかにすることができた。二人の文豪の 説話 が大正期の日本文壇で形成されていく過程の検証も行い、近代文学における 説話 の生成と展開という本研究課題に沿った研究である。

2019 年には、上記 3 の項目にも記載のとおり、本研究の海外共同研究者を招いた研究会を開催した。開催日時や参加者の発表題目は以下のとおりである。

研究会テーマ「講談・講談本と近代文学」

2019 年 8 月 1 日 13:30~17:00

於 国文学研究資料館二階中会議室

コーディネーター 青田寿美(国文学研究資料館准教授)

研究発表

(1) スティーブン・フィラー(アメリカ・オークランド大学近代言語文学部准教授)

「歴史にちなんだ物語の改変 講談と町田康文学を考える」

(2) 武田悠希(立命館大学非常勤講師)

「『写真画報』・『冒険世界』における講談の推移と特徴」

(3) 奥野久美子(大阪市立大学大学院文学研究科准教授)

「探偵実話」を冠する講談本について 国文学研究資料館所蔵の講談本を中心に」

小規模な会ではあったが、有意義な研究発表とその後の議論ができ、一定の成果を示すことができた。

2020年度（最終年度）は、上記3にも記載のとおりコロナ禍により予定していた研究会は開催できなかったが、2021年3月に本研究課題の総まとめとなる論集を刊行した。内容は、2019年度の研究会発表後、その発表内容に発表者各自でその後の調査研究の成果を大幅に加筆してまとめたものである。収載論文は以下のとおりである。

- ・武田悠希「『写真画報』に掲載されたSF冒険小説の講談速記」
- ・奥野久美子「探偵実話を冠する講談本『官員小僧』を例として」
- ・スティーブン・フィラー「社会主義者のストーリーテリングにおける「義賊」 荒畑寒村、堺利彦、上司小剣の『社会講談』」

研究代表者の奥野は、この論文により、本研究開始時から目的としていた事件もの講談本について、「官員小僧」という一素材を通して、諸本の把握と調査分析、内容の比較と説話の生成と発展を跡づけることができ、まとめの研究として成果を示すことができたと考えている。

また、2021年3月に、以下の論文が刊行になった。

- ・奥野久美子「芥川龍之介「義仲論」 秋里籬島「源平盛衰記図会」と「絵本源平盛衰記」」（彭春陽・仁平道明編『芥川龍之介研究 台湾から世界へ』（日本学研究叢書35）国立台湾大学出版中心 2021年3月、139-169頁）

本論文は本研究開始後の2017年に取り組み、同年に入稿を済ませていたものであるが、諸般の事情により刊行は2021年3月となった。木曾義仲の説話の近代における生成と発展を跡づけ、また芥川龍之介の原点とされる史論「義仲論」の生成過程を、その典拠文献等から跡付けたもので、これまで調査されていなかった、「義仲論」における源平盛衰記の引用元を明らかにすることができた。

以上のとおり、4年間の研究期間で、事件もの講談本（「官員小僧」）事件もの実録（芥川の開化期ものとの関連）や、一休説話、ロシア文豪の説話、木曾義仲の説話などを研究素材とし、それらの生成と展開を跡づけることができた。研究目的に記したように、日本近代文学が古典や外国文学だけでなく、実録・講談も含む豊かな土壌に咲いた文化であることを、一端ではあるが実証できたと言える。海外共同研究者との共同研究を論集にまとめることができたことも、大きな成果であると考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 奥野久美子	4. 巻 88-2
2. 論文標題 「芥川龍之介「山嶋」 原稿・草稿からの考察」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国語国文	6. 最初と最後の頁 33-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 奥野久美子	4. 巻 図書
2. 論文標題 「探偵実話を冠する講談本 官員小僧を例として」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 「講談・講談本と近代文学」研究成果報告論集	6. 最初と最後の頁 14-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24544/ocu.20210512-001	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 奥野久美子	4. 巻 図書
2. 論文標題 芥川龍之介「義仲論」 秋里雛島「源平盛衰記図会」と「絵本源平盛衰記」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『芥川龍之介研究 台湾から世界へ』（彭春陽、仁平道明編、国立台湾大学出版中心）	6. 最初と最後の頁 139-169
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 奥野久美子
2. 発表標題 「芥川龍之介の江戸と明治 莫都五十年言説の中で」
3. 学会等名 日本近代文学会関西支部春季大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 奥野久美子
2. 発表標題 「「山嶋」 原稿からの考察 」
3. 学会等名 第13回国際芥川龍之介学会（国際学会）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 奥野久美子（編）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 私家版	5. 総ページ数 56
3. 書名 「講談・講談本と近代文学」 研究成果報告論集	

〔産業財産権〕

〔その他〕

研究会「講談・講談本と近代文学」のご案内（教員からのお知らせ） https://www.lit.osaka-cu.ac.jp/jpn/posts/news8.html

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	フィラー スティーブン (Filler Stephen)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 講談・講談本と近代文学	開催年 2019年～2019年
-----------------------	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
米国	Oakland University			